

色々なことに挑戦して、共通項を分析してみてください。さい。その分析をもとに選択をしていけば、少しずつ自分の夢に近づけると思います

語り手 三橋 亮太（高校九期生 エンタメ業）聞き手 石田 歩夢

夢と大学時代

高校を卒業して、何年経ったのかな……。十年ぐらいですか。二〇一七年卒で、二〇一四年に高校入学でしたね。石田さんは何年生になるんですか。今高校二年生ですか。二〇二四年入学ですね。じゃあ十年！十年差ぐらいか！（笑）。

—あははは（笑）。

元々僕、海外で働きたかったんです。映画監督になりたいくて。実は小学校四年生ぐらいの時に、既に映画監督という言葉が頭の中にあっただですが、立命館大学の映像学部というところで映画作りを学べると知ったので、逆算して、高校三年間は自分のやりたいことに集中できる時間も作りたい。という考えで立命館守山高校に入学したのが始まりですね。その後、プラン通りに映像学部に進みました。大学四年間は、毎日作品作りで、本当に四年制大学なのかと思うぐらい、とにかく映像の毎

日でした。

—映画とかも……？

映画もあるし、CM、PV、MVなど、種類はたくさんありますね。ほぼ実家に帰らずみたいな日々でした。一人暮らしはしていなかったで、友達の家泊まり込み、一ヶ月に二、三回ぐらい帰るという感じでした。どこかのスタジオにいるか、どこかに撮影行ってるか、遊んでるか、みたいな日々でした。

—楽しかったですか。

超楽しかったです。超楽しい。（ゴリ押し）

—キャンパスは茨木ですね？

いえ、衣笠キャンパスです。元々映像学部は衣笠にありました。本当に楽しい四年間でした。最高の四年間。自分はこう、やりたいことがはっきりしているタイプなんです。映像学部もやりたいことが明確な人たちが集まる学部だったので、そういう人たちと一緒に過ごす時間は最高でした。

そこから色々な経験をする中で、ビジネスに興味を持ち始めたんですよね。作品作りは素敵なんですけど、結局それがお金にならなかったら意味くないか、とも思っちゃうタイプだということに気がついて。在学中に自分で映像制作の事業を始めました。そして事業をやりながら就職活動を迎えるのですが、やっぱりエンタメはやりたい。というのと、インターネットはもう外せない。これから働いてく上でインターネット

とエンタメ、この二つを最先端でやってる会社はどこかなと思い、色々調べてく中で、東京の会社が多く出てきて。やっぱり東京だなと。就活はとにかく早く始めて、先に先に動いて、すぐ決めました。

少し話は戻りますが、就職活動の前に、海外で働きたいという夢があったので、海外には行っておこうと思って。ロサンゼルス、ハリウッドに一人で一ヶ月ぐらい行っただすよ。ハリウッドで絶対映像撮るぞ、っていう目標と共に。そして現地のクリエイターとの繋がりで、ミュージックビデオの撮影を何件かお手伝いしたんですよね。でも、エンタメ産業を支える裏側のカルチャーが色々と衝撃的で。素直にやっぱり、日本がいいなって感じました。アメリカには憧れていたのですが、現実はこうかと思うことが多かったですね。

特に音楽は、「アメリカが……」みたいな話になるけど、アニメとか漫画がずば抜けている日本も、エンタメ世界最先端を走っていると思いますし、日本で自分のやりたいこともできるかなと改めて感じましたね。だからもう東京。働くなら東京以外選択肢はなかったです。

—でも東京って勇気いりませんか。一人で。まだ若いじゃないですか。

僕ちよつとずるいタイプなんで、先に友達を沢山作りしました（笑）。入社前のインターンをガッツリやって、働きまくりました。そうすると友達もできるし、大阪支社でのインターンだったので、同期みんなと一緒に東京行くみたいな感覚でした。そういう感じで周りを固めていけばビビる必要はないです。仲間づくりも大事ですね。

*

やりたいことは学生時代に思いつき

大学から現在までの話は一旦置いておいて、高校時代の話をした方が良いでしょうね。高校時代、部活はそれなりに本気でやりました。それは、シンプルに良かったなと思います。

—結構両立できてました？

両立……はしてたとは思いますがね。すごく成績が悪かったわけでもないから、両立してたって言ってもいいかな、ぐらいだとは思いますが。「超文武両道だね、三橋くん」っていうタイプではなかったです（笑）。自分の好きな勉強とそうじゃない勉強がはつきりしすぎていて、「映画作りにこれいる？いらなくね？」みたいなことばかり考えていました。これはレアケースだと思いますが（笑）。

—私は結構、やりたいこと言っちゃう（タイプで）（笑）。

いいですね！「やりたいことがある」と言える今このタイミングで何でもいいです。常に今やらないと、思いつきやる癖がつかなくなっちゃうんですよ。特にエンタメで働きたいとおっしゃっていたと思うんですけど、エンタメなんてもう、とにかくやりたいと思ってる人たちが集まっているような世界で、しかもそこで戦わないといけないわけなんです。思いつきやりたいと思えることを最初から振り切って、ビビらずにやれる癖をつけとかなないと、負けます。

部活以外では、受験勉強がなかったのと、ずっと映画監督になったかったので、動画作りを独学でやっていましたね。今でこそアプリでサクツとみんな作れると思うんですけど、当時はまだ全然そういうのがなくて。自分のお年玉を貯めて買ったパソコンですっと独学で動画を作っていました。チュートリアルも今みたいに溢れてないし、YouTubeで外国人が喋っている動画とかを見漁ってました(笑)。なので、部活して帰宅するのが二十時半ぐらい。二十一時ぐらいにご飯食べて、一回寝るんですよ。一時間ぐらい眠いタイミングで睡眠をとって、二十三日ぐらいに起きて、そこから四時間ぐらい、自分の好きな動画制作の独学の時間に当ててました。三時ぐらいにもう一度寝て、そして朝弱いので朝練には行けず……。というのをずっと繰り返してましたね(笑)。

—すごい……。

みんなが本来塾に行つて勉強する時間、自分のやりたいことができる。これがめちゃくちゃ良かったと思ってます。

—あ、文化祭とかどうでした？

文化祭はもうガチ勢です。

—なにしてたんですか。出し物とか。

文化祭はね、当時はやることは決まってたんですよ。一年生は映画撮る、とか。

—映画！

そう、映画です！一年生は映画を撮る。二年生は教室で舞台。三年

生はホールで舞台。ある程度その枠組みは決まっていて、内容はもちろんクラスごとでした。文化祭って何月でしたっけ？九月か。準備期間は二週間ぐらいありましたっけ。一週間？

—いや、もう夏休みとかもどんどん来て準備する感じです！

あー！そうでした。夏休みもやっていましたね。暑い教室でなんだから。「部活の間ちょっと抜け出していくから！」という約束だったのに「こうへんのかい」っていうくだりやんね(笑)。

—ははは(笑) ほんまにそんな感じですよ！(笑)。でも映画とかやってみたい……！

その頃にしたら本気で作品作りに向き合っていたので、三年生にはあすなろキングも獲ったんですよ。一年生、二年生もグランプリをいただいたので、三冠しました。そして全部責任者だったというのが自慢です。ただの自慢です(笑)。

—へえー！すごいじゃないですか！！

そうねー。やはりあすなろ祭は立守の目玉なんじゃないですかね。予算もあって色んなことができる。楽しい時間でしたし今にも生きてますね。

*

自分だけの共通項を見つける

石田さん、エンタメで働きたいんですよ？

—エンタメというか、テーマパーク。デイズニーで働きたくて。

そっちね。出る側ね！どうやってなるんだろうね。大学時代どう過ごすかは大事でしょうね。

—なんか学部ってどこがいいですかね？どこでもいいかな。

どこでもいいかです。本気で人の前に立ちたいのであれば、正直関係ないかもしれないです。自分でスクールみたいなのに通って、トレーニングして、色んなオーディションなりに出て、チャンスを自分で掴んでいくという時間を確保できたら、ある意味どこでもいいのかもしれないですね。本気でそこを目指すなら。

これは特段ネガティブな話ではないんですけど、例えば人前に立ちたい側だけど、その前に映像を学んでおきたい、という感じで本来の目的と少し違う選択をする人も沢山います。映像を作る中で、役者さんと触れ合ったりする時間があるのですが、実際触れ合った時に、「私って出る側を目標にしてたけど、意外とプロデュース側かも」とか、「こっちの方が向いてるかも」みたいなのは全然ある話で。そういうのも悪くはないんじゃないかなと思います。

僕も途中でビジネスを選択しましたが、大きく業界をこうしたいみたいな思いは変わらずあって、映画監督になりたいのも諦めてないし。軸さえブレなければやり方はいくらでもある、という考え方を持つのも重要かなと。なので選択をする上で沢山の経験を積むことがまずは大事ですね。今おいくつでしたっけ。

—十七です。

十七ですよ。あと一年ぐらいで恐らく人間として出来上がる部分は大きいと思うんですよ。十八年間生きてきて形成されてる「自分」というものがないで、自分の身を色々な環境に置いた時に、自分はやっぱりここは得意だなとか、ここは苦手だなとか、ここは本気でテンション上がるな、という感じで自分だけの共通項を掴んでいける瞬間があると思います。その共通項を軸にして、選択を積み重ねていけば夢に近づけると思います。

僕は映画監督になりたいと思ってたけど、今違うルートを選択している。ただ、このゴール自体をよく分解してみれば、映画監督って映像作品を作る指揮官をやりたいという話なんですよ。演出も決めたいしキャストも決めたいし、とにかくディレクションをしたい。そういうポジションでエンタメがやりたいということなんです。

今、自分で会社を経営していますが、とにかく全部決められる。そして事業内容はエンタメが中心なので、僕からしたらある意味夢は少し叶っているんですよ。まだまだけど。自分だけの共通項を大切に軸を作りつつ、夢も要素分解して照らし合わせながら走ると、意外と夢には近づくのかもしれないです。

—ちゃんと自分が中心に。

そう。なので石田さんも自分の夢の叶え方を広げてみてください。なぜデイズニーの舞台に立ってみたいのか。公式と同じような感じで因数分解してみてください。自分が惹かれているものは、こういった要素で構

成されているのでは。と整理できると意外と選択肢は広がると思います。選択肢はとにかく広げた方がいいと思っています。

バシッと真っ直ぐ目指していくのが一番カッコいいんですが……。これは、それが折れた時は相当な反動があります。いわゆる夢を諦めてしまふみたいな言い方になっちゃいますけど、折れ切っちゃうんですね。そうなると復活が大変です。でもいいですね、やりたいことがあるんですね！

―でも不安ばっかりなんで。

不安ばっかり！（笑）。何がですか。

―ほんまにこんな自分でいいのかとか、今やってることで叶えれんのかなとか。

んー。ちなみに誕生日はいつですか。

―四月。デイズニールランドと同じ日なんです。

おー！運命感じるね。僕は誕生日が二月なんですけど、必ず振り返りをする時間を作っています。一時間ぐらいいいんですけど、「二年前の誕生日を過ごしていた自分が見ていた世界ってなんだったっけな」を振り返るんです。そうすると、意外と進化してるなと感じられますよ。だって僕、一年前会社作っていないですし、十年前の高校二年生の自分から見ても、まさか東京に行って、なんとか脱落せずに働いて、いろんなことを経験させてもらって、自分で事業立ち上げて挑戦できているとは思ってなかった。意外と来年三年生の自分の誕生日とかに、「二年前

ってどういうこと考えてたっけな」みたいなのを振り返ると、結構自信になると思いますよ！

―あ、でも、中三の時とは全然夢違いました。

あー！夢は変わっていいんです。ちなみになんだったんですか。

―あの、バレエ教える、インストラクターがいいなと思って。でもなんかその、バレエって生き残っていくのが結構限られてて、コンクール優勝した人とかー、なんか経験豊富な人ばかりやから。まだそこまで自分うまくないし。好きやからこれから頑張ろうとは思いますが。

うんうん。そもそもやりたいことがあるのがすごいことで、それが変わることもいいことだと思うし、変わってしまったって不安になる必要もないかなと思うし。だからこそ、さっきお伝えしたように、共通項を見つけると、夢を分解して選択の幅を広げた方がいいと思いますよ！

―色々……。いろんな方向を持つといった方がいい……。

そうそう、職業って、先生とか映画監督とか名前があるじゃないですか。実はその名前に結構引つ張られて憧れてたりするんですね。でも、実際毎日働くとなると、その肩書きとかって意外とどうでもよくないのかなとも思います。自分が毎日どこにテンション上がっているのか、といったことが大切になるかなと。

なので、恐らくインストラクターになりたかったっていうのと、デイズニールの舞台に立ちたいというのは、因数分解した時に絶対どこかに共

通項があるはずなんです。絶対分解した方がいい。そしてその共通項を大事にした方がいい。夢や憧れるものは変わっていくものだと思います。どんな友達と絡むか、毎日通う場所がどこか、毎日何を食べるか、取り巻く環境が変われば自分の考えが変わっていく。変わっていく中でも、私はここが譲れない、共通項だなんていうものを一年に一回（誕生日に）振り返ってもらえると良いと思います！

—すごい、めっちゃ参考になります……！

こういう人になりたい。名前は別になんでもいいと思います。例えば……僕だったらエンタメ軸は絶対ブラさないというのと、自分がコントロールできる立場にいたい、イコール責任を持ちたい。自分でやること、責任をなるべく持ちやすい場所にいたい。この二つですね。

—やっぱりその学校でも責任持つこととか結構……。

大好きでしたね！

—私も結構そういうのやって、今も代議員やってるんですけど……、でも二人で、そのもう一人の女の子がめっちゃしっかりしててもう、引っ張ってもらってて（笑）。

おお（笑）。でも、そういうのもいいと思いますけどね。必ずしもナンバーワンになる必要はないし、ナンバーツーの方が意外と貴重なキャラクターだったりします。事業をやるにしても、一人ではできる範囲に限られますから、組織を作っていくという話になったら、やはりすごいナンバーツー、ナンバースリーみたいな人がいないと厳しいです

ね。ナンバーツーのポジションでしっかりしている人は、すごく必要とされる人材なので、誰にでもなれるわけじゃないんですよ。意外とナンバーワンに憧れたりするかもしれないですけど、一緒ぐらいすごい。目立ちたい感じ？

—いや、目立ちたいっていうか、役に立ちたいっていうか……。

じゃあぴったりかもしれないですね。ナンバーワンである必要はないかも。主演とは違う役割で活躍するタイプかもしれませんね。

*

自分を経験豊富にさせてくれる、それが立守

—今日もあの、忙しいなか。

そう、今日はね、このあと、一件ミーティングして、万博行きます！万博は仕事半分ですが、今日明日と行って、明後日からアーティストさんの全国ツアーの仕事ですね。大阪の後は浜松、浜松からは終電で東京帰ってまた打ち合わせですね（笑）。一生仕事してますね。楽しいですから。

—でも懂れます。なんかそれを楽しんでやってるのが。

そう。最初のほうにお伝えした通り、思いっきりやる癖をつけた方がいいです。その方が楽しむコツも掴める気がします。やってやってやりまくって、楽しんで。立守はそれができる環境だと思いますね。比較的周りの学校に比べたら、相当なチャレンジの機会をくれる学校だと思います。立守じゃなかったら、今頃自分はどんなことになっていたんだろう

うか、というぐらい良い環境でしたね。

―選んでよかったと思いました！

うん。やっぱりチャレンジができる環境をちゃんと創ってくれるし。今日の時間もそうだと思いますけど、自分が知らない世界に触れられる瞬間を意図的に作ってくれる学校でもあるし、良い学校だと思います。

そしてその先の大学は、もっともっと自分で決定していく環境なと、学びたいと思うものが一致している中でできる仲間もいます。いきなり集められてできた友達とはちょっと違う。自分で選択をした先で出会う人たちだから尚更仲も良くなるし、目指しているもの近いと一緒に熱くなれるし。

―確かに去年よりも今のクラスの方がなんか楽しい。似てる子が多くて。

うんうん。多分それがもつとね、大学になると顕著になると思います。だからこそ、共通項を分析してみてください。その共通項でちゃんと自分の軸を持って大学生活の選択をしていけば、絶対夢に近づくとあります。

こんな内容で大丈夫ですか（笑）。

―めっちゃいい感じですよ！

まあそろそろ。

―ありがとうございます！！

「感想」

自分の卒業した立守に誇りを持って語ってくださる三橋さんの姿から、私も色々な経験ができる立守で今しかできないことに思いつき挑戦したいと思いました。自分の叶えたい将来の夢を見つけるためには、「自分の持っている要素の共通項を見つけていけばいい」進路に悩んでいる私に、その三橋さんのメッセージが勇気をくれました。自分の興味、経験から共通している部分を見つけて自分の進路を切り開いていきたいと思います。



右：語り手 三橋 亮太さん
左：聞き手 石田 歩夢